希い

―原爆の園出征によせて―

この異形のまえに自分を立たせ
この酷烈のまえに自分の歩みを曝させよう

夏を追る追る声は雷よりも深く
絶叫より絶えと満ちる涙はかわくことなく重く
まざまざと私はこの本の中に見る
焼け焦れていった親しい人々、死んでいった信ずる人たちの顔を

むくろよ裸体の芸術の思えが
心にまといつくおのれのなかで
この何うに横たはったまゝじっと私を凝視するのは
たしかにわたし自身の眼だ！

あゝ歪んだ脚をまっすぐにのばせ
裸の腰を弱えやり
にぎられた血塗の一本々々を解きほぐそうとするこの心を
誠がはぐみえようか

滅びゆく日本の上に新しい戦争への威嚇として
原爆の光りを放ち
きょうだい二十四万を殺傷した者にむかって
怒えを上る怒りを誠の怒えを怒えよう

この事実のまえに自分を誓わせ
この歴史のまえにまことを悔あらーめぬよう